



Title	若年層デンマーク語における音変化と発音辞典の表記
Author(s)	間瀬, 英夫
Citation	IDUN. 2003, 15, p. 1-14
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/96448
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

若年層デンマーク語における音変化と発音辞典の表記

間瀬 英夫

1. はじめに

1.1. 序

近年, デンマーク語の発音変化が著しいと言われる。Henrik Galberg Jacobsen 氏は 2001 年 3 月 30 日に大阪外国語大学において “Aktuelle udviklingstendenser i dansk” と言う題目で講演をされた。そのなかで, 音変化に関する事にもいくつか触れられた。それらの変化は, r-音の影響による隣接母音の音質および音量の変化で, その結果, ret = rat = [ræd] (Dania 表記; 以下同様) (ret [ræd] → [ræd]; ret と rat の中和), kaos = kagers ([i] 脱落) = kærres (短母音の長音化) = kæres (広口化) = [kæ̃s], rude = rode = [rø̃ðə] ([rũðə] の広口化) のような対立の中和を生ずるところとなった。Tore Kristiansen 氏も大阪外国語大学での 2002 年 1 月 25 日の講演 “Standard Languages and Dialects in Denmark” のなかで r-音の影響に関して同様の主旨のことに言及された。

さて, ret [ræd], kærres [kæ̃s], rude [rø̃ðə] などの発音を行う話者は “若い” 世代であると言われる。しかし, “若い” 人とは何歳くらいの人なのだろうか。

Brink & Lund の *Dansk rigsmål* (1975) (以下, これを DR と呼ぶ) は 1840 年から 1955 年の間に生まれた標準語話者の話し言葉に関する調査研究を行った。同書は詳細かつ膨大な研究書であるが, これに先行して, 同書のコンパクト版である Brink & Lund: *Udtaleforskelle i Danmark* (1974) (以下, これを Utf と呼ぶ) が出版された。Utf: 10 によれば, 調査時にもっとも若い話者は, 同書出版時に 20 歳である。DR の調査に基づいて, その後 Brink *et al.* による大部の発音辞典 *Den Store Danske Udtaleordbog* (1991) が出版された (以下, これを SDU と呼ぶ)。SDU では, 1930 年生まれの話者の明瞭発音形を (見出し語直後の) 第 1 形とする。つまり, 1930 年生まれの話者 (の発音) を基準にして, ældre, yngre, unge の世代 (の発音) に区分する。Ældre は 1910 年以後生まれ, yngre は 1931 年以後生まれ, unge は 1950 年以後生まれとする。このほか, 年齢は明記されていないが, yngste という世代の話者も取り上げられている。(本論では, SDU の世代区分 ældre, yngre, unge, yngste は原語のままで用いる。)

DR, SDU で unge とされる世代の話者は 1950 年以後に生まれた話者であるが, 1950 年生まれの話者は現時点では 50 歳を超えていることになる。したがって, 現在の若い世代である 30 歳代, 20 歳代は, DR, SDU で yngste として言及されて

いる世代，あるいはそれよりもっと若い世代ということになろう。

Basbøll (1969) の記述する言語 Advanced Standard Copenhagen は SDU の yngre の言語に対応し，Thorsen & Thorsen (1986), Basbøll & Wagner (1985), Becker-Christensen (1988) の記述する言語も yngre のそれに対応する。以下では，これらの文献で記述されている言語を SDU の yngre の言語とみなす（間瀬（1994）でもこの言語を対象としている）。これに対して，Grønnum (1996) の記述する言語は，同論文執筆当時に 20 歳から 25 歳のコペンハーゲンの話者のそれであるが，これは SDU の yngste に対応する言語と言えよう。

以下では，これらの文献の記述に基づいて，種々の音変化の結果，発音および音韻単位にどのような変化が生じるかを概観し，またこれらの発音変化が発音辞典や発音表記付きの辞典でどのように扱われているか，あるいは読み取れるかを概観する。発音辞典は SDU および Hansen (1990) を用いるが，このほかにデンマークの国語辞典である *Nudansk ordbog* も加える。同辞典は発音表記を行ってこなかったが，2000 年初版発行の *Nudansk ordbog med etymologi* からは見出し語（および屈折形の一部）に発音を付している。デンマーク人のための辞書に発音表記がなされたことは画期的なことと言えよう。

1.2. 種々の前提，省略記号など

書名の省略記号（参考文献表参照）：

- B-C = Becker-Christensen (1988);
- B/W = Basbøll & Wagner (1985);
- DR = Brink & Lund (1975);
- NDO = Becker-Christensen *et al.* (2001);
- NG = Grønnum (1996);
- PMH = Hansen (1990);
- SDU = Brink *et al.* (1991);
- Utf = Brink & Lund (1974).

書名省略記号+コロンの後の数字は参考頁を示す。

音声記号は Dania を用いる。この記号は DR, Utf, SDU, NDO, B-C などで用いられている記号である。

SDU の発音形は第 1 形（=見出し語直後の「明瞭形」*distinkthedform*）および第 3 形（=「主要形の後のコメントなしの発音形」*ukommenterede former efter hovedformen*）を示す。ただし，両者共通の場合は 1 個の発音形のみを示す。SDU の第 3 形は基本的には yngre の発音形である。第 3 形は “ø” が隣接音に同化した形で示されることがしばしばあるが，他の文献との比較のために，これは非同化

形に直して示す。

SDU では第3形の右肩に注を示す番号が示されることがある。注の内容は同書 1573 頁以下の Nummerhenvisninger で記述されている。本論では、この注を参照するときは “SDU Nr. ...” とする。

SDU, DR, Utf などで用いられている [j] は、その他の文献では通常 [j] で示されているが、本論では [j] に統一する。

綴り字は、必要な場合には、<> に入れて示す。

同綴り異音語には品詞表示（+意味表示）を行うが、同音異義語には品詞表示は行わない。

2. 音変化の記述

2.1. 長母音の短音化

長母音の短音化については、§3.8 で再び取り上げるが、これは長母音が同一音節中の接近音（=無摩擦継続音）[ð, i, w, ɿ] の前で短音化する現象である。短音化が起こると、長母音にあった stød は接近音の後に移る。

soð [søð] → [søð], svag ['svaði] → ['svai], bog ['båw] → ['båw],
bord ['bo:r] → ['bor].

2.2. [ræ] → [rɑ]

音節頭 [r] の後での母音の広口化である (Utf: 30f.; DR: 129f.; SDU Nr. 40).

frisk ['fræsg] → ['frisg], drift ['dræfd] → ['dráfð], skrift ['sgræfd] → ['sgráfð],
drink ['dræng] → ['dráng].

[ræ] が [rɑ] になるのは、SDU Nr. 40 によれば、すでに yngre (=1931 年生まれ以後) にみられる。しかし、SDU の frisk などの項を見ると、第1形、第3形とも ['fræsg] で、yngre では必ずしも [rɑ] にはならないようである。というよりは、yngre では [æ] が標準である (§1 の諸文献参照)。一方、NG の話者 (=SDU の yngste に対応) では [rɑ] である。したがって、[rɑ] は yngre でもありうるが、主として unge/yngste の発音とみるべきであろう。[ræ] → [rɑ] の変化は音声的変化で、音韻的変化には至らない (§2.3 の表 1 参照)。

2.3. [rɑ] → [rɑ]

(⟨ræ, rɑ⟩ 綴りの) [rɑ] → [rɑ] は DR の調査対象期間の末期、すなわち 1950 年代生まれの話者では、ゼロ音、歯茎音および唇音の前では [rɑ] に変化した。しかし、軟口蓋音の前では [rɑ] のままである (DR: 129f.; Utf: 30; SDU Nr. 44)。NG の話者でも同様である (NG: 12)。したがって、[rɑ] は unge の発音という

ことになる。

[rä] → [rɑ] の変化は [rä] を飛び越しての変化のように見えるが、[ä] と [a] はほとんど同じ音である。NG は Dania の [ä, a] の両者を IPA [a] で対応させている。また、Thorsen & Thorsen (1986) も [rä] に対応の音を IPA [rɑ] としている。したがって、この音変化は [rä, rɑ] から [rɑ] への変化と考えてよいと思われる。

[rä] → [rɑ] の変化の結果、本来の [rä] (<re, ræ>) と本来の [rɑ] (<ra>) の対立は失われ、両者は中和することになる。

ret = rat, rest = rast, skræl = skrald, rende = rande, træf = traf,

trævl = travl, skræmmer = skrammer, skræppe = skrappe etc.

§2.2 および 2.3 の音変化による前舌非円唇母音の音韻対立は表 1 のようになる。§2.2 の音変化は音韻対立に影響を及ぼさないが、§2.3 の音変化は /ræ/ と /ra/ の対立を軟口蓋音の前以外では中和させることになる。(この中和を認めると、間瀬 (1994: 12) の短母音の音韻対立表の表示とは一部異なることになる)。

表 1 : 2.2, 2.3 の音変化後の音韻・音声形 (二重線は音韻境界を示す)

	X_X		R_[+vel]	X_-[vel]				
i	blist	/i/	(trick ¹)	trist	ridt			/i/
e	list	/e/						/e/
æ	læst ²	/æ/						/a/
å		/a/	drik drink	rist	tres	brede ³	drift	
ä			træk dreng					
a	last							
ø			trak trang	rest	præst	bræt	ret	træf
				rast		brat	rat	traf

R = r-音; [vel] = 軟口蓋子音; X = その他。

trick¹ ['trɪg] は unge ではふつう ['træg] (SDU trick の項);

læst² = 名詞; brede³ = 形容詞中性形。

2.4. [æ]~[å]

<-æ> 繰りの長母音 [æ] は “r” ([ʌ, ɔ]) の前で [å] となる。SDU Nr. 48 によると、多くの yngre および大多数の unge で [æ] は [å] となる。Basbøll (1969), B/W では [æ] のみが示されているが、B-C, Thorsen & Thorsen (1986) では [æ, å] の両形が示されているところから見て、yngre では両形が存在するとみるべきであろう。DR: 150f. および Utf: 34 によれば、調査対象話者の最後の 10 年 (÷1946

年生まれ以後) に [ɑ̄] が現れる。たとえば

stær ['sdǣr, 'sdǣr] → ['sdā̄r, 'sdā̄r], kær ['kǣr, 'kǣr] → ['kā̄r, 'kā̄r], bære ['bǣr] → ['bā̄r], skære ['sgǣr] → ['sgā̄r]. ([ɑ̄-r]-形では短音化形が優先)

([r] の前での長母音の短音化については、§ 2.1 および § 3.8 参照).

この結果、次の対立の中和を生じうる(ただし [i] の脱落(§ 2.7)を前提とする):

bære, bæger = bager, hære = hager, jæger = jager, sære = sager, stære = stager,
være, vægre = vager.

ただし、“r”が屈折形のマーク(語尾)である場合には [ǣ] が保持されるが、これは同一語の他の語形や派生形からの類推によるものと思われる (DR: 150f.; Utf: 34) :

læge ['lǣg] + “r” → ['lǣr], bevæger [be'ver], europæer [öwro'pǣr]
(cf. europæisk [öwro'pǣ'sik]).

このように [ǣ] が保持されるとすると、たとえば læger ['lǣr] と jæger ['jǣr] は音韻的に対立することになる。

音韻的にみると、<-ær> における [ǣ] → [ɑ̄] は “r” に後続される環境に現れているが、長い “a” の場合は “ə” に後続されている。そして “ə+r” が全体で [ɔ̄] となる。

bære ([bǣr] →) ['bā̄r] vs. bare [bər, bərə].

したがって、上記の中和は音声レベルでの中和で、音韻レベルでの中和ではない。同一音環境では音韻対立は保持される。

/i:r/	[i'ʃ/iʃ]	gi'r	[i]	mire
/e:r/	[e'ʃ/eʃ]	sker	[ē]	mere
/æ:r/	[æ'ʃ/æʃ/ə'ʃ/əʃ]	gær	[ǣ/ə̄]	mære
/a:r/	[a'ʃ]	skar	[ə̄]	mare

まとめてみると、“r”の前の [ǣ] は、yngre では [ǣ, ə̄], unge では [ɑ̄] となる。

2.5. [r] の前の短母音の長音化

これは 2 音節(複音節)中の短母音に起こる現象である。[r] + 弱音節 [ɔ̄] (<-rre>) の前の強強勢音節中の短母音が長音化するものであるが、母音が長音化すると、[r] は先行母音に吸収される:

stirre ['sdi:rə] → ['sdi:r].

DR: 255 によれば、この長音化は調査対象期間最後の 10 年(=1946 年生まれ以後)に現れてきた。SDU Nr. 10 では、この現象は unge に認められるとする。NG の話者にもこの長音化が認められる (NG: 12)。これらの記述によると、長音化は unge の言語になってからみられる音変化のように解釈されそうであるが、B-C:

94 では、この長音化は *yngre rigsmål* に起こると述べられ、*stirre, kurre, spørge* は *fire, kure, snøre* と韻を踏むことができるとする。また、PMH, NDO でも長音化形が示されているので（§3.3 参照），すでに *yngre* で長音化の傾向が見られると考えるべきであろう。

stirre ['sdi:rə, 'sdi:rɔ], *fyrre* ['fɔ:rə, 'fɔ:rɔ], *forværre* [fɔ:væ:rə, fɔ:væ:rɔ], *herre* ['hå:rə, 'hå:rɔ], *bærret* ['bæ:rətɔð, 'bæ:rɔð], *større* ['sdɔ:rə, 'sdɔ:rɔ] (DR, SDU).

この音変化の結果、[ɔ] (<-re>) の前では本来の長・短母音は両者とも長母音となり、音長に関して中和が起こる：

svire = *svirre* ['svi:rɔ], *kure* = *kurre* ['ku:rɔ], *kære* = *kærre* ['kærɔ], *hære* = *herre* ['hå:rɔ], *være* = *værre* ['vå:rɔ], *for styret* = *forstyrret* [fɔ:sdy'rɔð], *døre* (名詞複数) [dɔ:rɔ] - *tørre* [tɔ:rɔ] (DR, SDU).

([i] 脱落を伴って) *kærre* = *kære* = *kager*, *herre* = *hære* = *hager* (Utf: 49).

なお、[-ɑ:ɑ], [-å:å] の長・短母音の中和はすでに SDU の標準話者にみられる：

bare = *barre* ['bɑ:rə], *båre* ['bå:rå] - *aborre* ['ɑ:bå:rå].

2.6. [ru(·)] → [ro(·)]

DR によれば、[r] の後で狭口母音が広口化されることによって、調査対象期間末期には [ru(·)] が [ro(·)] になる傾向が明瞭に現れ始めたが (DR: 133)，それほど一般化していない (DR: 168). Utf: 32 では多くの *yngste* に認められ、その結果、本来の [ru] と [ro] は中和するとする : *rude* = *rode*, *gru* = *gro*, *krus* = *kros*, *brug* = *bro* (Utf, DR). SDU Nr. 47 では、[ru(·)] の代わりに [ro(·)] が *unge* で一般的であるとする : *russer* ['rusɔ:, 'rosɔ:], *brug* ['bru:, 'bro:], *skrue* ['sgru:ə, 'sgro:ə]. NG の話者では [ru] は [ro] になるとされる (NG: 12). しかし、NG の話者と同世代の Janus Spindler Møller 氏 (大阪外国語大学客員教授) は、たとえば *rug* ['ru:] と *ro* ['ro'], *rus* <陶酔> ['ru:s] と *ros* <賞賛> ['ro:s] を明瞭に区別している。

2.7. [i] の脱落

前舌長母音後の語中、語末の [i] は DR の調査期間中に完全に消滅した (DR: 298).

sag ['sa:i, 'sa:j] → ['sa:], *neg* ['ne:i, 'ne:j] → ['ne:], *lægen* ['læ:jən, 'læ:jən] → ['læ:ən], *kager* ['kå:jɔ, 'kå:jɔ] → ['kå:rɔ].

この結果、次のような音韻対立の中和が生じる (DR: 298) :

ager = *a'er*, *klæg* = *klæde* (動詞), *sneg* = *sne*, *søg* = *sø*, *bæger* = *bære*, *skøger* = *skøre*.

SDU Nr. 23 は、*unge* では [i] なし形が唯一形であり、[i] が脱落する場合には長母音の短音化は起こらないと述べている。

この [i] 脱落は [i] と前舌母音の音質がよく似ているために, [i] が先行母音に吸収されてしまった (DR: 302). 現代語では, [i] が存在する場合には先行の母音は, とくに単音節中で短音化されるが (たとえば *sneg* ['sne*i*'] → ['sne*i'*']), [i] 脱落の場合には短音化されない. この場合, 元の ['sne*i*'] の [i] が脱落するように見えるが, そうではなく, 短音化形の ['sne*i'*'] の [i] が脱落する際に代償的に先行母音が長母音になると, DR: 302 は解釈しているが, これは妥当であろう.

なお, *unge* の言語に限らず, DR: 301 によれば, いくつかの頻度の高い語では古くから [i] の脱落がみられる: *tage* ['ta', 'tə] (全屈折形で), *dag*, *goddag*, *sagde*, *lagde*, *egentlig*, また合成語でも *undtagen* (通常 2 音節形の ['*ånta*gn]) , *gentage*, *betaget*, *fejltagelse*, *undtagelse* などで. これらの語における [i] 脱落はすでに Jespersen のカードに「多くの人に聞かれる」と記されていると, DR は述べている.

3. 辞書の発音表記

本章では, 発音(付き)辞書 SDU, PMH, NDO の音声表記から § 2 で述べた音変化がどのように読み取れるかを見てみる. その他, § 2 で取り上げなかつたいくつかの音声形についても見てみる.

3.1. [ræ] → [rä], [rä] → [rɑ]

[ræ] → [rä] (§ 2.2) となる語形は辞書ではすべて [ræ] で表記されている. しかし SDU には, この [ræ] をもつ語 (の第 3 形) には注 Nr. 40 ([ræ] → [rä]) が示されている. したがって, この [ræ] (綴りは基本的には <ri>) は「*unge* では [rä] となる」と読む.

frisk ['fræsg] → ['fräsg], *drift* ['dræfd] → ['dräfd].

[rä] → [rɑ] (§ 2.3) となる語形も辞書ではすべて [rä] で表記されているが, SDU ではこの場合も注 Nr. 44 (歯茎音, 唇音に後続される [rä] → [rɑ]) が示されている. この [rä] (綴りは <re, ræ>) は「*unge* では [rɑ] となる」と読む.

rest ['räsd] → ['rasd], *præst* ['präsd] → ['prasd], *ret* ['räd] → ['rad].

なお, § 2.3 で述べたように, この [rä] は軟口蓋音の前では, *unge* でも [rä] のままである: *træk* ['träg], *dreng* ['dränj].

3.2. [æ] ~ [ɑ]

“r”の前での [æ] ~ [ɑ] の交替形 (§ 2.4) は PMH では示されている. PMH では, たとえば *kær* ['kær', 'kai̯r'] のように, 単音節形では短音化形のみに [a] が示されているが, 複音節形ではたとえば *kære* ['kæ̊r̊', 'kai̯r̊'] のように両形が示されている. SDU では *kær* ['kær', 'kæ̊r'], *kære* ['kæ̊r̊'] のように表記されているが, 第 3 形

には注 Nr. 48 が示されており、[æ(·)] と [a(·)] の両形を認めていることになる。これに対して NDO は kær [kæ'ə], kære [kæ'ə] のように [æ] 形しか表示していない。したがって、当該 <-ær(e)> の [æ] は「すでに yngre でも [æ(·)] または [a(·)] になり、unge では [ȧ] になる」と読む。

3.3. [ø] の前の短母音の長音化

§2.5 で述べた [ø] (<-rre>) の前の短母音の長音化は SDU では表記上は示されていないが、当該語形には注 Nr. 10 (「短母音は長音化しうる」) が示されている。これに対して、PMH および NDO では部分的に長音化を認めているに過ぎないが、両者の間には解釈の違いがある。PMH では半広口・広口短母音にのみ長音化を認める、たとえば færre [fǣrə, fǣr̥ə], fyrrre [fɔ̄rə, fɔ̄r̥ə]。この他、PMH では半広口・広口短母音をもつ語形すべてに長音化形を示している：afspærre, desværre, forværre, færre, herre, indespærre, kærre, snerre, spærre, terre, værre, fyrrre, forstørre, større, udtrørre, spørge。一方、NDO は狭口短母音にのみ長音化を認める、たとえば dirre [d̥īrə, 'd̥īr̥ə], purre [pūrə, 'pūr̥ə]。しかしながら、奇妙なことに、NDO は狭口短母音をもつ語形すべてに長音化を認めているわけではないようである。狭口 [y] をもつ語は forstyrre のみであるが、これには長音化形を示しておらず、[fɔ̄s'dȳrə] の短母音形のみを示している。また、[i], [u] をもつ語にも長母音形を認めているものと認めていないものがある。次の語では長音化形を示している：dirre, klinre, pirre, plirre, tirre, purre, surre, knurre (最後の語は現今では半狭口母音 [knɔ̄rə, 'knɔ̄r̥ə] をもつ)。しかし、次の語では短母音形しか示していない：forvirre, irre, nidstirre, stirre, svirre, virre, burre, forpurre, kurre, murre, snurre。この区別は、§2.5 に示した DR, SDU などの例語を参照してみると、適切とは思われない。

PMH は 1990 年発行の辞書であるが、当時は狭口・半狭口短母音の長音化はそれほど一般的ではなかったかもしれないし、NDO の場合も yngre の発音形を示しているので、上記のような発音表示となつたのかもしれない。いずれにせよ、SDU が記述しているように、unge の発音では短母音の種類に関係なく、「長音化形が一般的」とみるべきであろう。

3.4. [ræi] ~ [rǣ, raī]

<re>, <rae> が長母音を表すとき、SDU の第 1 形では <re> は [ræi], <rae> は [rǣ] で表記されている。したがって、この区別を行う話者では /re:/ と /ræ:/ は中和しないことになる。しかしながら、Basbøll (1969: 35) に明記されているように、yngre の言語では /re:/ と /ræ:/ は中和する。PMH, B-C, B/W でも中和形しか示されておらず、また SDU Nr. 42 でも両者は中和すると記述されている。すなわ

ち, [ræi] は [rǣ] (通常 [rǣ] と [rǟ] の中間) および [rǟ] と交替する. 大多数の yngre では [rǣ] または [rǟ] (またはその中間形) を用いる: kreds [krǣs, krǟs] (SDU). NG の話者でも中和形が用いられている (NG: 15ff.).

この中和の結果, 多数の同音異義語が生ずるところとなったことはよく知られていることである: skrevet = skrævet, kreds = kræs, Gregers = grækers, reb = ræb, tre = træ etc.

辞書の表記は次のようにになっている. SDU では第3形でも [ræi] で示されている語もあるが, [ræi] の場合も [rǣ] の場合も注 Nr. 42 が示されている (上記参照). PMH ではすべて [rǣ] で表記されているが, これは [rǣ] または広口化した [rǟ] になると読むべきであろう. NDO は一部の語に [ræi] を認めているようである. それらは SDU の第3形でも [ræi] を認めている語のうちのいくつかである. NDO が [ræi] と表記する語は greb (名詞; 動詞過去形), gren, kredse, reb, rebe, rede (動詞) ['ræi'], regel, ren, tre. しかし, 次の SDU の第3形で [ræi] で表記されている語は NDO では [rǣ] で表記されている: bredde, fredag, kreds, rebus, recipe. NDO の kreds (名詞) ['krǣs] と kredse (動詞) ['krǣsə] では [rǣ] と [ræi] で異なる表記がなされているが, なぜなのか分からぬ.

いずれにせよ, /ræ:/ と /rǣ:/ は年齢層に関わりなく中和して [rǣ, rǟ] になるが, それにもかかわらず, 筆者がこれまで聞いてきたところでは, /ræ:/ を [ræi] と発音する話者が年齢層に関係なくあるように思われるが, これは個人語のレベルのことかもしれないし, 筆者は明確な判断はできない.

因みに, /ræ:/ と /rǣ:/ の中和した音素は /ræ:/ である. つまり, yngre では /ræ:/ が消滅した. § 2.3 の [rǟ] は /ræ/ の実現形であるが, これは unge では唇子音および歯茎子音の前では [ræ] /ræ/ に吸収されることになる. その結果, unge では yngre の /ræ:/ のほかに, 軟口蓋子音の前を除き, /ræ/ の部分的消滅が加わることになる.

3.5. [rȫ] ~ [rȫi]

⟨rø̄⟩ が [rø̄] を表すとき, SDU Nr. 43 によれば, [rȫi] と交替する. ただし, 大多数の yngre では [rø̄] のみ. このことは諸文献, 辞書類の記述でも一致している. SDU の第1形が [rȫi] で表記されている語は次のものである: frø, frøken, frøs (過去), prøve, røbe, rød, røse, røve (røver, røveri), skrøbelig. いずれにせよ, [rø̄] の語は少数である (Utf: 32).

以上のことから, [rø̄] と交替する二重母音形は一般的ではないとみなしてよいと思われる.

3.6. [ø:, œ:] ~ [ø:, œ:]

たとえば *dør* (名詞), *smøre* などの母音は SDU, PMH とともに [ø:] と [œ:] の両者を示しているが, SDU Nr. 49 によれば, 大多数の *yngre* では [œ:] を用いる. Basbøll (1969), B-C, B/W では [œ:] のみが示されており, NDO でも同様である. それゆえ, 現在では *yngre* も *unge* も当該音は [œ:] のみとみなすべきであろう.

3.7. 長母音後の [v, w]

たとえば *kniv*, *lave* の <v> は SDU, PMH とともに [v] または [w] と表記しているが, NDO では [w] のみを用いている. 現今では [w]-音のみが用いられると思われる所以, この点は NDO が現実を反映した表記を行っていると言えよう. しかし, NDO の表記にはあまり適切とは言えない点がかなりある (§3.9 参照).

3.8. 長母音の短音化

§2.1 で簡単に触れたが, 長母音は同一音節中の接近音 (=無摩擦継続音) [ð, i, w, ʌ] の前で短音化 (=短母音化) されることがよくある. この現象はとくに単音節形中でよく起こる. 短音化が起こると, 長母音にあった *stød* は接近音の後に移る. 長母音は短音化しても, その音質は原則として変わらない (DR: 221ff.; SDU Nr. 8, 9; B-C: 93; PMH: 20). この短音化には次のような傾向が見られる: *stød* をもつ母音 (主として単音節中の母音) の方が *stød* をもたない母音 (通常 “ø” を含む弱音節に後続される複音節中の母音) よりも, また狭口母音の方が広口母音よりも, そして前舌母音の方が後舌母音よりも短音化する傾向が強い (DR: 227).

この短音化はすでに Basbøll (1969) の記述する言語, すなわち *yngre* の言語でもとくに単音節形では一般的である. NG の話者では複音節形中でも進行中であるが, 長母音も聞かれる (NG: 11f.). NG の話者と同世代の Janus Spindler Møller 氏の言語では複音節形では長母音が用いられている.

上述のように, この短音化はすでに *yngre* の言語で見られるため, 辞書でも短音化形はふつう示されている. SDU では単音節形では原則としてすべての語に, 複音節形では一部の語に短音化を認めるが, 必ずしも一貫性があるとは言えない (詳細は, 間瀬 (1994: 25ff.) を参照されたし). PMH では狭口母音 [i, y, u] は [ð], [w] の前ではすべて短音化される (PMH: 20 参照). 長母音後の [i] は PMH ではすべてかっこ入りで示される (たとえば *eg* ['e(i)]) ので, 短音化は明示されないことになる. [i] の前では広口母音に短音化を認めている. NDO では, SDU, PMH が長母音形のみまたは長・短母音形を認めている語に対して短母音形しか認めていない場合がごく少数あるが (たとえば *vred* ['vræð], *rød* ['røð]; cf. SDU ['vræ'ð, 'vræð], ['røi'ð, 'røð], PMH ['vræ'ð], ['rø'ð]), これらを除けば,

基本的には短音化形は示していない。NDO では [i] (長母音後の <g>) はほとんどの場合に表記されているが、不規則動詞の過去分詞形の一部に [i] のない形が示されている: *besteget* [be'sde'əð], および *nedsteget*, *oversteget*, *sveget*. 一方, *afveget* [au'vejəð] では [i] が示されている。同様に [i] のある *fraveget*, *sneget*, *steget*, *undveget*, *veget*. この違いはどこから來るのか筆者には分からぬ。

まとめて見ると、単音節形中の長母音の短音化形は現在では一般的な発音形とみなしてよい。ただし, *unge* では [i] は脱落するので (§2.7), 短音化は起こらない。複音節形では今のところ長母音の短音化はそれほど顕著ではない。

3.9. NDO の音声表記に関する注意点

NDO はデンマーク人のための国語辞典であり、語の音声表記はデンマーク人が理解できればよいとするものようである。そのため, *Dania* ではない記号が少数用いられていたり、その他にも簡略表記が少数見られる。

本論ではここまで NDO の異なる表記は *Dania* に対応させて表記してきたが、以下、NDO の独特的記号および表記について見てみる。

Dania [g] の代わりに [g] が用いられている。また、*Dania* [ā] と [a] は両者とも [ā(̄)] で表記される (たとえば *tal* [tāl], *tale* [tālə], *kanal* [kānāl]; cf. SDU [tāl], [tālə], [kānāl]). この 2 点は PMH の表記法と同じである。[g] は諸言語の音声表記にも見られるもので、とくに問題はないが、[ā] と [a] の区別はあった方がよいであろう (間瀬 (1990: 98f.) 参照)。

Dania [s̄] の代わりに [sj] が用いられる (たとえば *sjæl* ['sjæl'], *station* [sda'sjo'n], *march* [mār̄sj]). この記号でデンマーク人は理解できるのであろうが、音声学的見地からは [s̄] が 2 個の音 [sj] であるかのような印象を与えるので落ち着かない。

“r” 音は音節頭の [r] と音節末の [r̄] の区別を行わず、両者とも [r̄] で表記する。単音節形では [r] だけでも問題はない、たとえば *rør* ['rɔ̄r̄] (cf. SDU ['rɔ̄r̄', 'rɔ̄r̄']). 複音節形の母音間では、ときにはあいまいになる、たとえば *rørig* ['rɔ̄riŋ̄]. SDU では ['rɔ̄ri', 'rɔ̄riŋ̄'] と表記されているが、もし第 2 の “r” が音節頭子音なら、['rɔ̄ri'] となり、SDU の第 3 形 ['rɔ̄riŋ̄] の [sj] は導かれない、なぜなら第 1 形の [r̄] が音節末子音であるからこそ [x̄] → [sj] の同化形が導かれるのである。

NDO でもっとも奇妙な表記は語末閉鎖音 [p, t, k], [b, d, g] である。語末子音として綴り字が <p, t, k> ならば [p, t, k], <b, d, g> ならば [b, d, g] と表記している: *lap* ['lap] vs. *lab* ['lab], *kup* ['kup] vs. *skub* ['sgub], *mikroskop* [mikro'sgo'p], *font* ['fɔ̄n̄t̄'] vs. *fond* <基金> ['fɔ̄n̄d̄], *kort* ['kå:t̄] vs. *akkord* [a:kå:d̄], *idiot* [idi'o:t̄]; *muk* ['må:k̄] vs. *mug* ['måḡ], *tryk* ['trö:k̄] vs. *tryg* ['tröḡ], *apotek* [apo'te:k̄]. これらの [p, t, k] は [b, d, g] で表記されるべきである、なぜなら語末で [p, t, k] と [b, d, g] は音声的に (そして

音韻的に) 対立することはないからである。NDO でも語末以外の末尾音には“正しく” [b, d, g] を用いている：snaps ['snabs], lappe ['læbə] (cf. lap ['lap]); erts ['ärds], duftie ['dåfda] (cf. duft ['dåft]); koks ['kɔgs], trykke ['tröga] (cf. tryk ['trökl])。 (なお、hjort は [jå:d] と“正しく” 表記されているが、これは [t] と表記するつもりだったのではないかと思われる (cf. hjord [jå:d])。いずれにせよ、この [p, t, k] の表記は混乱を招く。)

3.10.まとめ

これまで述べてきた発音形、とくに *unge* の発音形を辞書の発音表示からどのように読み取るかをまとめてみる。

表2

(強勢記号は省略するが、強勢は語の第1音節にある；SDU の発音表記の後の数字は、当該音変化についての注番号を示す。)

§ 音変化	語例	SDU	PMH	NDO	変化後
2.2. <i>ræ</i> → <i>rå</i>	frisk	<i>fræsg</i> ⁴⁰	<i>fræsg</i>	<i>fræsg</i>	<i>fråsg</i>
2.3. <i>rä</i> → <i>rɑ</i>	ret	<i>räd</i> ⁴⁴	<i>räd</i>	<i>räd</i>	<i>rɑd</i>
<i>rä</i> = <i>rä</i>	træk	<i>träg</i>	<i>träg</i>	<i>träg</i>	<i>träg</i>
2.4. <i>æ</i> ~ <i>å</i> ; <i>æ</i> → <i>å</i>	kær	<i>kæ'r, kæs'</i> ⁴⁸	<i>kæ's, kå'</i>	<i>kæ's</i>	<i>kå'</i>
	kære	<i>kæ's</i> ⁴⁸	<i>kæ's, kå'</i>	<i>kæ's</i>	<i>kå'</i>
2.5. 短母音の長音化	kærre	<i>kå:s</i> ¹⁰	<i>kå:s, kå:s</i>	<i>kå:s</i>	<i>kå:s</i>
	dirre	<i>di:s</i> ¹⁰	<i>di:s</i>	<i>di:s, di:s</i>	<i>di:s</i>
	stirre	<i>sdi:s</i> ¹⁰	<i>sdi:s</i>	<i>sdi:s</i>	<i>sdi:s</i>
2.6. <i>ru(·)</i> → <i>ro(·)</i>	gru	<i>gru'</i> ⁴⁷	<i>gru'</i>	<i>gru'</i>	<i>gro'</i>
	russer	<i>ru:s</i> ⁴⁷	<i>ru:s</i>	<i>ru:s</i>	<i>ro:s</i>
2.7. <i>i</i> -脱落	eg	<i>e'i, ej'</i> ²³	<i>e'(i)</i>	<i>e'i</i>	<i>e'</i>
3.4. <i>ræj</i> ~ <i>ræ:, rä:</i>	tre	<i>træj'</i> ⁴²	<i>træ'</i>	<i>træj'</i>	<i>trä'</i>
	kreds	<i>kræj's</i> ⁴²	<i>kræ's</i>	<i>kræ's</i>	<i>kra's</i>
	kredse	<i>kræjsə</i> ⁴²	<i>kræ:sə</i>	<i>kræjsə</i>	<i>krå:sə</i>
3.5. <i>rö</i> ~ <i>röj</i>	frø	<i>frö'l', frö'</i> ⁴³	<i>frö'</i>	<i>frö'</i>	<i>frö'</i>
3.6. <i>ö</i> ~ <i>ɔ</i> ; <i>ö</i> → <i>ɔ</i>	gøre	<i>gö:s, gö:j</i> ⁴⁹	<i>gö:s, gö:j</i>	<i>gö:s</i>	<i>gö:s</i>
3.7. <i>v</i> ~ <i>w</i> ; → <i>w</i>	liv	<i>li:v, liw'</i>	<i>li:v, liw'</i>	<i>li:w</i>	<i>liw'</i>
	hæve	<i>hæ:və, hæ:wə</i>	<i>hæ:və, hæ:wə</i>	<i>hæ:wə</i>	<i>hæ:(·)wə</i>

SDU の場合には注の記述によって表中の「変化後」の発音形を導くことができる。

PMH, NDO の場合には、本論で述べたように、「変化後」の発音形を導くことができる場合とできない場合があるが、[rä] → [rɑ] を除けば、それほど大きな問題ではない。この音変化に関しては PMH および NDO を参照する場合には注意を要する。また、NDO の [d]+“r” は [d]+“r” と読むことにも注意。

Unge における一部の発音形の変化は音韻体系全体の変更をもたらすには至らない。というのはこれらの音変化は r-環境に現れる一部の音と接近音の前に現れる長母音にのみ影響を与えるだけであるからである。とは言え、これらの音変化によって長・短母音の対立が一部失われることは小さなできごととは言えないかも知れないが、これについては改めて別の機会に検討したい。

Lydudviklinger i “unge”s danske rigsmål og lydskrift i udtaleordbøgerne

Hideo Mase

Resumé

Udtaleformerne såsom *ret* = *rat* = [rad], *kaos* = *kagers* = *kærres* = *kæres* = [kɑɔs], *rude* = *rode* = [roðə] osv. siges at blive benyttet af “unge” rigsmålstalende. De “unge” talende er dem der er født efter 1950 ifølge Brink & Lunds *Dansk rigsmål* og *Den Store Danske Udtaleordbog* (=SDU). De “unge” er altså nu nået til 50 år! Deres udtaleformer skal man selvfølgelig tage hensyn til. Spørgsmålet er om man kan læse sådanne udtaleformer ud af lydskrift i udtaleordbøgerne. I SDU kan man finde (næsten) alle udtalevarianter. Fra lydskriften i Peter Molbæk Hansens *Udtaleordbog* (1990) og *Nudansk ordbog med etymologi* (2000) kan man udlede de fleste “unge” udtaleformer, men ikke den vigtige og bemærkelsesværdige udvikling [rä] til [rɑ] (se Tabel 2, § 3.10).

Det lader til at NDO er beregnet hovedsagelig for danskerne (ikke for udlændinge). Det er måske derfor der bruges nogle upræcise (altså, forstæelige kun for danskere?) lydskrifttegn, fx [sj] i stedet for [ʂ]. Det mest forvirrende er ordfinale lukkelyd: bogstaverne -p, -t, -k transskrives med [p, t, k] og -b, -d, -g med [b, d, g] skønt de to rækker lyd ikke er fonologisk og fonetisk forskellige, men de rigtige [b, d, g] bruges i ikke-ordfinale stillinger! (se § 3.9).

参考文献
(欧文文献の発行地は、特記のないかぎり København)

Basbøll, Hans. 1969. "The phoneme system of Advanced Standard Copenhagen", *ARIPUC (=Annual Report of the Institute of Phonetics, University of Copenhagen)*, Vol. 3, 33-54.

Basbøll, Hans & Johannes Wagner. 1985. *Kontrastive Phonologie des Deutschen und Dänischen. Segmentale Wortphonologie und -phonetik*. Tübingen: Max Niemeyer Verlag.

Becker-Christensen, Christian. 1988. *Bogstav og Lyd. Dansk rettskrivning og rigsmålsudtale*. Bind 1. Gyldendal.

Brink, Lars & Jørgen Lund. 1974. *Udtaleforskelle i Danmark. Aldersbestemte – geografiske – sociale*. Gjellerup.

Brink, Lars & Jørgen Lund. 1975. *Dansk rigsmål. Lydudviklingen siden 1840 med særligt henblik på sociolekterne i København*. Gyldendal.

Grønnum, Nina. 1996. "Danish vowels – scratching the recent surface in a phonological experiment". *Acta Linguistica Hafnensia*, Vol. 28, 5-63. The Linguistic Circle, Copenhagen.

Thorsen, Nina & Oluf Thorsen. 1986. *Fonetik for sprogstuderende*. 3. reviderede udgave, 8. oplag. Københavns Universitet.

間瀬英夫. 1990. 「Peter Molbæk Hansen 著 『デンマーク語発音辞典』について」, *IDUN* IX, 93-126. 大阪外国語大学.

間瀬英夫. 1994. 「デンマーク語の母音」, *IDUN* 11号, 1-42. 大阪外国語大学.

発音辞典、発音表記付き辞典：

NDO = Becker-Christensen, Christian *et al.* (red.). 2001. *Politikens Nudansk Ordbog med etymologi*. Politikens Forlag. 2. udgave, 1. oplag.

PMH = Hansen, Peter Molbæk. 1990. *Udtaleordbog*. Gyldendal.

SDU = Brink, Lars *et al.* 1991. *Den Store Danske Udtaleordbog*. Munksgaard.